

基本原則その一 初めから漢字表記で学習を

私の主張する漢字教育の基本原則の第一は、『一般に社会で漢字を用いて表記している言葉は、必ず最初から漢字表記で学習させる』ことである。

“学校・楽器”という言葉が“がっこう・がっき”という表記でまず教え、それから何年もたって“学校・楽器”という漢字を教える今の教育は、明治以後のものであり、これが漢字教育を歪め、教育効果を悪くしている最大の原因なのである。一刻も早く改めることが望ましい。

“がっこう・がくもん”では、同じ“学”が異なった表記になり、両者の関連が切れてしまう。

“がっこう”は“がくもん”をする所ではなくて“がっき”を教えてくれる所だと連想しかねない。“校舎・講堂”の意味だって、“こうしゃ・こうどう”ではとても理解できないだろう。

かな表記を漢字表記に改める仕事を“貼り漢字”という。一・二年生の教科書に用いられている言葉を全部漢字に改め直しても、その数はせいぜい五百字くらいのものである。

五百字くらいの漢字の学習は、一、二年生にとっては、手頃の頭の体操であり、事実喜んで学習している。かなばかりの文章よりずっと読みやすくよい、というのがその感想である。

“貼り漢字”とは、図のようなガリ版刷りの漢字カードを作り、子供にこれを一枚一枚切り取って、教科書のかなの部分に隠れるように貼らせ

るのである。

これは大変に時間を食う仕事であり、一見無駄に見える仕事であるが、実はなかなか実のある仕事なのである。

正しく貼るべき所に貼るために、各人が真剣に読むので、“貼り漢字”が終わった時には、通常の読解学習などよりずっと内容をよく理解しているほどである。できない子はできる子に教えてもらい、全員がそれぞれの能力を最高に発揮する、実に良い学習である。“貼り漢字”の代わりに、“ふり漢字”がある。かなのわきに漢字を書き入れるのである、漢字のわきにつけるかなを“ふりがな”というので、それにならって“ふり漢字”というわけである。これでも、その言葉の理解には役立つ。

“貼り漢字”はその準備が大変なので、私もお奨めするのに気が引ける。しかし、がんばって“貼り漢字”を实践されたい。現在全校あげて実践しているものに、青森県弘前市立前沢小学校(花田弥郷校長)と島根県斐川町立出東小学校(稲田和夫校長)がある。

漢字に直すのに、いくつかの段階がある。漢字に直せるものは全部漢字に直すのが最もよい。しかし、「そこまではできかねる」と言うのなら、自分のできる範囲でやればよいのである。

例えば、(1)当用漢字の範囲内に限る、(2)教育漢字の範囲内に限る、(3)その学年より一年(二年、または三年)上の学年配当漢字に限る、というように自分でその基準を決め、その範囲で貼り漢字を实践されたらよろしい。